

[118]語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1551328>

出版情報：語文研究. 118, 2014-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

中尾友香梨・井上敏幸 著

『文人大名 鍋島直條の詩箋巻』

本書は、肥前鹿島藩第四代藩主鍋島直條由来の詩箋巻を翻刻・注釈したものである。直條は、近世初期の西国随一の文人大名と称すべき人物であり、その生涯のうちに四千首近くの漢詩と和歌を残したとされる。本『詩箋巻』は、直條が数多く残した詩文の一部を収載したものであり、本書の執筆者の一人である井上敏幸氏の所蔵である。その内容は、直條とその友人たちによる漢詩、和文、漢和聯句などを一卷の卷子に仕立てたもので、直條を含めて計十名による三十一の作品が収められている。今その所載漢詩の作者を挙げると以下の通りである。林鳳岡（漢詩四首）・何心声（漢詩五首）・人見竹洞（漢詩三首）・逸民（漢詩一首）・格峰実外（漢詩四首）・假我堂人（漢詩一首）・和堅（漢詩三首）・鍋島直條（漢詩三首）・梅嶺道雪（詩偈二首）・桂巖明幢（詩偈一首）・十名の漢詩二十六首と、竹洞の和文二篇および鳳岡と直條の漢和聯句（発句・脇・第三の付合三句）。

本書の執筆にあたっては、井上氏が「解題と書誌」、和文の翻刻と語釈と担当し、中尾氏が「まえがき」と漢詩の翻刻、書き下し、語釈と担当されている。「まえがき」において中尾

氏は、本『詩箋巻』の直條以外の作り手を、一、江戸の林家一門（林鳳岡、人見竹洞、和堅、逸民）、二、地元鹿島の黄葉僧たち（梅嶺道雪、桂巖明幢、格峰実外、假我堂人）、三、長崎の元唐通事の何心声の作品が多く収められていることが特に注目に値すると指摘されている。また、収録作品の大半が詩箋に記されていることにも注目され、本『詩箋巻』に使用されている詩箋の一部が、明末清初の中国に存在した書肆由来のものであることを指摘し、本『詩箋巻』はその内容だけでなく、芸術の面においても極めて高い価値を持つと述べられる。

また、本書巻末の「解題と書誌」において井上氏は、本『詩箋巻』作製時における直條の編集意図を考察されている。まず、本巻にまとめられた詩文が、直條十五歳から二十五歳までの十一年間に作られたものであると推定され、直條自らの手になる自身の履歴書『感往録』の該当期間の記事を検討されている。そこから見えてくるのは、当時二十歳前後の青年が、本巻にその詩文が収められる鳳岡や竹洞、梅嶺等のほかに中院通茂や日野弘資といった当代一級の文化人達と交遊しているという事実である。氏は、本『詩箋巻』が、文人への強い志向を抱いた当時の直條が師友との出会いを記念するために編んだものであったと述べられる。しかし、右に挙げたような通茂や弘資といった超有名な人の詩文が収載されていないことに関しては、当時の直條の文事を、手にとって指導し

た人々から贈られた記念すべき作品を編集したことによる、
として本『詩箋巻』の性格を指摘される。

本書によって、西国の一大名である直條と当代の林家一門
および地元鹿島の黄檗僧等との詩文を介した交遊の一部を見
てとることができる。このことは、単なる直條自身の文人趣
味の問題にとどまらず、当時の鹿島藩と林家の関係、また当
代文化の中心地で薰陶を受けた直條と、鹿島ひいては佐賀の
学問や文芸との関係を考える上で重要な視点を与えるもので
あると思われる。

(平成二十六年三月 佐賀大学地域学歴史文化研究センター 二六cm 六〇頁)

大庭卓也・生住昌大 編

『久留米大学御井図書館貴重資料企画展

『西南戦争——報道と、その広がり』

本書は、平成二十六年四月十五日（火）から八月十五日
（金）に久留米大学御井図書館で開催された企画展「西南戦争
——報道と、その広がり」に際して作成された図録である。

これまで近代文学で注目されて来なかった西南戦争物の錦絵
であるが、当時東京や大阪で盛んに売り出され、その数は六
〇〇種以上にのぼったと言われる。この夥しい数の作品の影

響関係や内容推移の検討は十分に行われておらず、これらの
作品の一端を紹介したのが本書である。目次は以下の通り。

ごあいさつ

本企画展のねらい

西南戦争の報道と出版界

図版

戦争の始まり

混乱過熱する報道

大阪における報道

さまざまな報道

戦争の終結

暮らしへの浸透

参考図版

参考資料

作品解説

西南戦争関連年表

参考文献

作品目録

「西南戦争錦絵」は新聞記事を視覚化する、補完的な役割を
果たしたメディアでもあり、時に虚構を交えながら西南戦争
を視覚的に体験する資料として、出版界を賑わせたという。

「文学の暗黒時代」と言われた明治一〇年代の出版の動向を明らかにする上でも、この時期の西南戦争の報道と出版は見逃せない。本企画展のねらいで大庭氏が述べるように、「西南戦争の報道がもつ文化史的な波紋を改めて考え、江戸から明治にかけての文学史のひとコマを明らかにする」ためにも欠かせない一冊であると言えよう。

(平成二十六年三月 久留米大学文学部 A4版 八一頁)

井上洋子 著

『柳原白蓮 (西日本人物誌 (20))』

本書は大正期の女流歌人、柳原白蓮(本名燦子)の生涯を追ったものである。彼女は佐々木信綱が主宰していた竹柏会にて活動し、機関紙「心の花」上に短歌を発表している。また「赤毛のアン」の翻訳で知られる村岡花子とは親友でもあった。構成は以下の通り。

はじめに

第一章 生い立ち

第二章 最初の結婚と破婚

第三章 炭鉱王伝右衛門

第四章 白蓮誕生

第五章 筑紫の女王

第六章 燦子と龍介

第七章 生きる

エピローグ 燦子と白蓮

柳原白蓮関連資料

柳原白蓮関係年譜

柳原白蓮参考資料

あとがき

第一章では燦子の生い立ちと同時に、華族であった柳原家の置かれた状況、特に女子が家のための結婚を強いられてきた事実が述べられる。燦子も例外ではなく、はじめ遠縁の北小路家に嫁入りするも、夫との不和が原因で離婚。二度目に嫁いだ相手は、筑豊の炭鉱王伊藤伝右衛門である。身分と教養の差が生んだ二人の間の溝は埋めようもなく、冷え切った夫婦生活の果てに、白蓮は宮崎龍介のもとへ出奔。新聞紙上には、白蓮から伝右衛門へ向けた公開絶縁状が叩きつけられ、「白蓮事件」に世の中は騒然とする。菊池寛の『真珠夫人』をはじめとして、当時から様々なメディアがこの事件をモチーフとして扱ってきた。「しかし、スキヤンダルとして事件が消費され、物語化を繰り返す過程で見失われたことも多い。」と筆者は述べられ、数多の資料を参照しながら白蓮とそ

の周囲の人間を追う。たとえば伝右衛門は、白蓮を追い詰めた心ない成金の夫としてしか語られてこなかった。だが、本書は伝右衛門が炭鉱事業において発揮した先見性や、教育事業への貢献について評価する。物事にこだわらない潔さと熱い人情を持つ彼の姿に、意外な感を持つ読者もおられることだろう。

加えて、第一歌集『踏絵』をめぐる同時代評にふれている他、「白蓮」という雅号の持つ意味を作品集「幻の華」との関係から見出ししており、歌人白蓮の自意識を考える上で非常に興味深い。柳原家の家系図、新聞紙上に発表された白蓮と伝右衛門の応酬、関連年譜など、附録の資料も大変充実しており、今後の白蓮研究への寄与は疑いないだろう。

(平成二十三年十月 西日本新聞社 B5版 二六一頁 一、五〇〇円＋税)